

地域の会 7/18 福島視察研修 感想

日 時	平成24年7月18日(水)6時30分～19時
視察先	<p>〈午前〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・富岡町生活復興支援センター「おだがいさまセンター」 (福島県郡山市内) <p>〈午後〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原子力災害現地対策本部 (福島OFC) (福島県庁本庁5階)
視察参加者	<p>【委員】 浅賀、新野、石坂、川口、桑原、佐藤(幸)、佐藤(直)、佐藤(正)、三宮、高桑、高橋(優)、武本(和)、徳永、中沢、前田、吉野 ・・・16名</p> <p>【原子力安全・保安院】 飯野所長、吉村保安検査官 【資源エネルギー庁】 磯部所長 【新潟県】 磯貝原子力安全対策課主査 【柏崎市】 関矢防災・原子力課係長 【東京電力】 佐野地域共生室課長、山本主任 【ライター】 吉川 【事務局】 広報センター 須田業務執行理事 石黒主事</p>
対応者	<p>【富岡町生活復興支援センター「おだがいさまセンター」】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・富岡町総務課長 滝沢氏 ・同 企画課長 横須賀氏 ・同 生活環境課係長 佐藤氏 ・同 総務課長代理 菅野氏 ・富岡町富田仮設住宅自治会長 遠藤氏 ・富岡町社会福祉協議会事務局長 松本氏 ・富岡町生活復興支援センターアドバイザー 青木氏 <p>【原子力災害現地対策本部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平岡 原子力災害現地対策本部副本部長 ・木野 総括班長・広報班長 ・小山 原子力安全対策課長 (福島県)

【概要】 上記施設を訪問し、震災当時の国、自治体、住民各々の対応状況及び現在の状況等を伺った。原子力災害現地対策本部では平岡副本部長、木野班長及び福島県の小山原子力安全対策課長と意見交換を行った。
委員の意見、感想を以下にまとめた。

【委員感想・意見】

《委員》

富岡町で最後に伺った事で、『訓練、備えは大事、大切だが、自分を信じ、自分の考えで行動する。国、県の指示待ちをしたが、何もなかった。人を頼ることはダメ。情報を自分で判断出来るよう、日頃からいろいろと考えていく』が印象的でした。

賠償問題、除染等遅々として進まない事に苛立ちを覚えても、私たちは遠い傍観者。被災された方々の心情を思うと、もっと考えていかななくては本当に理解したことにならない。

肌で感じてこれたのでよい視察が出来たと思う。

《委員》

- ・事故発生時に通信手段が途絶えたことが、住民の避難を遅らせることになり、住民の不安やパニック状況を作り出してしまった。どんな過酷な状況の下でも、通信手段を確保することが住民の生命を守る面では重要なことであることを再認識した。
- ・災害時には避難方法として自家用車を使わざるを得ない状況になるので、避難用の道路の確保や整備を早急に進める必要があることを痛感した。
- ・仮設住宅に住んでいる人たちの状況が近くまで行っていたのに見えなかったのは残念であった。代表者の方や2～3人の方から生の声を聞きたかった。
- ・原子力災害対策本部は現在、県庁舎の一部を借りて設置されているが、フロアには80～90名もの職員が所狭しと机を並べて仕事をしている。一時的な措置と思うが、あまりにも作業環境が悪く、こんな所で現在の事故処理の対応やこれからの原子力災害を防止することができるのだろうかという疑問が残りました。

《委員》

福島への視察が実現された。地域の会としては二度目の訪問だが、思いもできない再訪だ。

おだがいさまセンターでは、互いに遠慮と気遣いをしながらのスタートであったが、後半では、本音の会話が感じられ、現地の方々の状況が肌で感じられ意義があったと思う。

原子力災害現地対策本部での会談は、淡々と行われたが、やはり後半では地域の会ならではの、住民でありながらも情報交換を重ねてきた会らしいやりとりが見られ、出向いた意義を感じた。

午前、午後を重ね合わせ、またバスの中での委員の意見や日頃の活動からも、現場である住民の思いや考えと中央の方々との認識に大きなギャップを感じ、また間におられる自治体の難しいお立場も再認識させられた。

これからのことも、多様な住民の意見や考えの情報発信、伝達役としての役割の重要性を感じた。

《委員》

今回の研修視察は大変勉強になりました。往きのバスの中で柏崎市の職員から、富岡町の原発震災の概要を説明していただき、予備知識として大変役

に立ちました。

郡山市で富岡町役場の職員などからのお話を聞いて、町民が被災後、故郷を追われて、家族や地域がバラバラになったり、4回～10回も避難所を移転されたりして、いかにつらい目に遭われたかを知りました。現地の司会者の方が、個人的体験を含めた生々しい現実を語ってくださったので親近感が湧き、厳しい現実が身にしみるように感じられました。二度と繰り返してはならないと思いました。

柏崎刈羽原発は中越、中越沖の二度の地震で相当なダメージを受けており、次の地震が来たら危ないと思います。私たち地元住民は、これまでの原発依存の状態を改め、一日も早く脱原発の段取りを進める必要があると思いました。

《委員》

甘かった原子力に対する認識を思い知らされた福島視察

■被曝管理区域内の日常生活

3.11以降、郡山市福島市には数回、放射線計測に行った。昨年5月には各公園で「測定値が $3.8\mu\text{Sv/hr}$ 以上だから使用禁止」の立て札がたっていた。福島行きの際には、車中から放射線量を測定してきた。今回の測定でも、会津盆地から線量が上昇し、中通（磐梯熱海から福島市内）は放射線管理区域相当の場所が存在した。最大値は最初の訪問先「おだがいさまセンター」のバス停止場所脇の枯れ草付近で $1\mu\text{Sv/hr}$ を越えていた。除染の効果は限定的であるにも関わらず莫大な費用を投じる一方で、汚染地域で日常生活が展開されている事実。原子力問題の深刻さを改めて考えさせられた視察だった。

■国の放射線管理はダブルスタンダード

放射線管理区域内では飲食が禁止される等の厳格な規定がある。しかし、福島の現実には原発の近傍や飯館村等の避難地域の他にも放射線管理区域相当の汚染地域が存在する。この地域では、日常生活が行なわれている。国の対応はダブルスタンダードではないのかと国の今井氏に聞いたが明確な回答はなかった。

■またも聞いた東京電力の本性

「避難所に、東電社員も東電社宅住民も誰もいなかった」「3月11日19時頃には原発関係者の家族が、21時頃には警察関係者の家族が避難した」「何度も避難先に説明にきた原発職員に、家族はいつ何処に避難したか聞いたが、何も答えなかった」等々の話を聞いてきた。説明の役場課長の話「自主判断で全員避難した富岡町（人口1.6万）は、川内村（原発から20km）と三春町（原発から45km）にわかれて避難した。三春町の避難所に東電職員が会津から応援に来た。川内村の避難者が深刻な食糧不足となっていることを知り、派遣された東電職員に三春から川内に届けるよう依頼したが、上司の指示にないと断った」

《委員》

まずもって被災者の方々に心からのお見舞いを申し上げるとともに、過去に例のない複合災害の被災地において、既存のシステムが全て崩壊した中でそれぞれ必死に活動をして来られた、また現在も懸命にご努力されている全

ての方々に心から深く敬意を表したい。

●最終的には個人の判断力が問われる

富岡町の生活復興支援施設「おだがいさまセンター」で被災自治体担当者から当時の状況を直接聞く事が出来たのは大変良い経験だった。

通常の段取り・手順では対応できない局面で「最終的には現場の判断」とおっしゃった言葉に防災対策の根幹を見た気がした。

仕組みや段取りを整備することと同時に各個人の現場対応力を向上させ、それを維持することが重要であるということ。

今後の防災訓練を進めて行く中で欠かすことのできない視点のひとつだと感じた。

●被災者サポート体制の遅れ

「おだがいさまセンター」では富岡町社会福祉協議会より被災者サポート体制の現状も伺った。

全市民のうち応急仮設住宅入居者が 20%、みなし仮設住宅（借上げ住宅）入居者が 80%という状況の中で、仮設住宅入居者（20%）にのみようやく届くようにはなったがみなし仮設入居者（80%）にはまだまだ満足いくケアが出来ていないという現実。

一方柏崎に避難されている富岡町の方々には心のケア含めたサポート事業が開始されて既に一年以上経過している。

主体となる社会福祉協議会の組織体制が崩壊した中で仕方のない事ではあるが深刻な状況だと受け止めている。

が、その中でも広報手段としてインターネット FM の開始とか、被災者自立支援策として織物、染色作品の販売事業を開始するなど、すこしずつ前向きな動きが見られるという事に一筋の光明を見た気がした。

●県原子力災害対策本部と被災自治体とのコミュニケーション

福島県庁の原子力災害対策本部において警戒区域及び避難指示区域の見直しについての説明を受けた。

福島第一原子力発電所の事故が収束したことをうけて警戒区域を解除し、従来の避難指示区域を避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域などに区分し直すという事であるが、その前提は除染作業の進行いかんによるものである。

午前中にお話を聞いた富岡町では復興公営住宅（仮のまち）を郡山市やいわき市などに加えて富岡町内の低線量区域に建設したい意向をお持ちのようであったが、県の資料を見ると富岡町の大部分が「帰還困難区域」に指定されるように思われる。

わずかながら避難指示解除区域になったとしてもインフラ復旧含め生活再スタートの場となり得るのだろうか？

被災者の方々のお気持ちも当然理解できるのだが、そのあたりにおいて原子力災害対策本部と被災自治体との間に意識と現状認識のズレがあるのではないかと感じた。

●全体的に

一言でいえば「百聞は一見に如かず」。

被災自治体の方々の当時の奮闘ぶりは各報告書や諸資料の「活字で」目にしてはいたが、やはり当事者の生の声をお聞きするとその一言一言にこもる様々な思いが事前の想像以上に深く感じられた。

少し残念だったのは、今回の視察の趣旨目的からすると仕方のない事ではあるが「おだがいさまセンター」での時間が短かった事。

柏崎市内で避難者のサポートを行う団体に関わっている関係で、現地の被災者の状況をもう少し詳しく（入居者の年齢層や健康状態の変化、仮設生活での様子、生活再建に対する意識など）伺い、県外避難者との違いを見たかったのだが、それはまた別の機会にしたいと思っている。

避難者の方々の生活再建に対する考えが「賠償次第」と一言でくくられるのは、それが動かしようのない現実であることは承知しているが、もう少し踏み込んだ話を聞いてみたいという思いも残った。

《委員》

おだがいさまセンターで国、県の対応がなく自治体のご苦労をお聞きした。被災者の生の声も聞け、緊急時の行政対応、避難誘導、バス、経路等々住民の防災意識、訓練がいざという時の動きと、まとまりにつながることを確認できた。

社会福祉の担当者から支援活動の説明も受けた。印象に残ったのは、雨、風がしのげる屋根のある仮設住宅に入れたから良いだろうでなく、生きがいのある支援が大切である。染と織物で製品を作り販売する。雇用を生む支援にもなったと。早い復旧復興をお祈りしながら見守って行きたいと思えます。

経済産業省原子力安全・保安院柏崎刈羽原子力保安検査官事務所にいらした木野専門官から事故の経緯、これからの除染、線量の低い地域から住民が帰還できるようにしたい、5年間は帰還困難区域もあると説明を受けた。お痩せになりご苦労が伝わってきました。

まだ安全確認が定かでなく議論もつくされていない。電源車、消防車、冷却機能が万全なら再稼働ありきは容認できない。今でも壊れそうという火力発電所を無理に動かして、今年の強制節電はない。復興にかかる膨大な予算を考えると火力発電所の設備を整えた方が安全だ。今夏を乗り越えられたら原子力発電に頼らなくても経済も国民生活も維持できると考えるのは尚早でしょうか。原油高でも18年後2030年は原発0%にしたい。

《委員》

1、富岡町生活復興支援センター「おだがいさまセンター」住民交流会
私の座っているところから、住民の皆さんの手によるものと思われる大きな七夕飾りが、今も忘れられません。その短冊にはこんな言葉が・・・

- 家族が元気で生活できますように
- 早くおうちに帰りたい
- 早く復興できますように
- ヨボヨボが素早く動くバイキング(?)
- みんなが健康で故郷に帰りたい
- 夕陽の波止場大好き マドロス ガンロン(?)
- 脱原発を願って

なんと我々の心に重く響くではありませんか。私は書き写しながら目頭が熱くなってしまいました。地震、津波、原発爆発事故で避難を余儀なくされた被災者の気持ちが、野田首相や東電の幹部たちにはどう映っているのか。私は聞きたい！

さて、センター職員（町職員、社協職員）全員が被災者とのこと。総務課長さん他の町職員の3, 11 午後 2 時 46 分からの住民避難についての苦労と混乱の様子が、生々しく話されてなお、印象深かったのは「原発（放射能）という目に見えないものに追われているということは不幸なこと」、「リアルタイムでない情報に振り回された」、「支援をもらった人々には足を向けて寝られない」との発言でした。

今、困難の中にあっても復興を目指す拠点と心がここにあることは素晴らしいことだと強く思います。そしてそこから怒りをぶつけたいところが見えてくるのではないのでしょうか。

2、原子力災害現地対策本部

衆院予算委員会でも明らかになった福島県内での除染の遅れは、県内住宅の除染が計画 8 万 8 千戸に対して実績 2 千戸にとどまっていることでした。視察当日、大量の放射性物質が広範囲に拡散してしまったことの実実は共有できても、除染の効果については非常に歯切れの悪い印象を持ちました。「やってみなければわからない」、「場所によっては効果の薄いところもある」とはなんともはや。「後始末はしっかりつける、国際的な力を借りても（除染は）しなければならない」と言うのであれば、子供たちの未来のためにも早く手を打てと言いたい。政府は、福島県など関東東北など八県を汚染状況重点地域に指定し、年間放射線量が 1 ミシーベルト以上の区域を除染するとしています。結局原発事故の影響は福島県内にとどまっていけないことがよくわかります。オール日本の激甚災害としてとらえるべき問題であると認識します。

17 日のいわき市立豊間小学校のプール開きに先立っては、住民の協力で 8 回も除染をするも線量が下がらなかったことが分かっているのに、「承知していない」とは、何事かと言いたい。このように、住民や自治体が住宅や公園の除染を自主的に行った例は少なくないのだらうと思われまます。個人まかせ、自治体任せではなく、政府の責任で早く除染を進めるべきだと思います。16 日野田首相は「福島の再生なくして日本の再生なし」と言ったがそうであれば、前のめりな再稼働を進める前に除染と賠償を国民が納得できるようすすめて欲しいものです。

《委員》

「百聞は一見に如かず」であり、昨年からは是非行きたいと思っていたので、大変期待をして臨みました。

◎ 午前の部 郡山市「おたがいさまセンター」

おびただしい仮設住宅が立ち並ぶ風景を見て、中越沖地震を思い出した。木造の仮設が多くあり何故かホッとす。主に原発事故での情報不足に翻弄された役場職員のごきは、福島弁になごみながらも右往左往するさまに心が痛んだ。『とにかく（損害賠償）補償問題が解決しないと今後の生き方さえ決められないんです』が強烈な印象だった。ただ、避難した苦労・反省などについて、住民の声をもっと聞きたかった。

◎ 午後の部 福島市「原子力災害現地対策本部」

現地で機能できなくなった「オフサイトセンター」であり、県庁舎（これがまた築後相当な建物で心配？）を訪ねたが、とにかく狭いというのが第一

印象だった。対策上中樞の施設・機関なのだから、せめてゆとりのあるフロア（しかも1階や2階）へ再移動して欲しいと感じた。廊下の記者会見場に座り込むマスコミもご苦労様。

これまで、マスコミの映像・音声・活字・写真でしか得られなかったが、原子力安全・保安院、福島県、富岡町役場、富岡町社会福祉協議会、自治会長のみなさんの「生の声」は、やはり迫真に迫るものがあった。さらに、淡々と語るその口ぶりには、被災後1年4ヶ月にわたる苦悩もまた垣間見れた。かんばろう福島！！

《委員》

地域の会で7月18日、福島県の郡山に在る富岡町の被災者仮設住宅の「おだがいさまセンター」と福島市の原子力災害現地対策本部を視察してきた。

「おだがいさまセンター」では行政と被災者から直接、発災時と原子力災害による避難の状況についてお聞きすることができた。笑顔で明るくお話いただいたが、苦渋の判断と混乱を極めた様子がヒシヒシと感じられた。

2時間ほどお話しを聞いたが結論的には、国や県、どこからも指示は来ない。住民一人一人が覚悟を決めて自ら判断をし、自分たちを助けるより道はないと言っておられた。災害時に対処法はないが事前に準備できることは全てやる必要がある。あたり前だが重く感じられた。柏崎では避難道路一つ取っても準備できていない状況がある。自分の家にいつ帰れるのか自由に立ち入れない現状のなか、最も被災者が困っていることは賠償が決まらないことで身動きできない状況が続いていることだ。賠償なくして明日が始まらない現実がある。

午後県庁に向かう。柏崎から対策本部に参加している人も居るそうだ。旧知の地域の会関係者が出迎えてくれた。原子力災害現地対策本部は福島県庁内の古い講堂に有った。びっしり並べられた机に120人以上の人々が働いていた。廊下に雑然と並べられたIT機器が対策本部の慌ただしい活動を物語っていた。見学後、保安院のご好意で現状説明と質疑応答をした。先の見えない息の長い活動が1年3ヶ月過ぎたが、今後も25年以上活動は続くそうだ。対策本部の皆様の健康とご活躍を願って帰路に付いた。

《委員》

郡山市富田町若宮前、507戸の応急仮設住宅が並んでいる・・・富岡町の応急仮設住宅の所在地は12箇所、その中の1箇所でしかないのだが・・・その規模の大きさに圧倒される。ここにある富岡町復興支援“おだがいさまセンター”で町の方々から、避難の様子や防災、町の当面の課題（除染・支援・雇用など）、今後の課題（事故の収束・賠償・環境整備）、センターの取り組みをお聞きした。防災に関して、考える上での多くのヒントをいただいた。中でも「最後は自分しか、自分で判断するしかない。判断できる人が多くいることが大事。個人の考え、意識をきちんとしておくこと」が印象に残っている。

町の課題については、国レベルでの策が必要、国は町と連携をとり実効ある解決策を示せないものかと思った。町の苦悩の大きさが伝わってきた。

続いて福島市にある“原子力災害対策本部”へ。

福島 OFC 見学後、富田審議官から新たな避難指示区域設定などの説明、平岡副本部長・県原子力安全対策課小山さんを交えて質疑応答があった。除染、賠償、年間積算線量 20 ミリシーベルト等が話題となった。説明や質問の答を聞きながら、国が示している様々な事は、富岡町の課題に応えるものなのか、被災市町村が納得いくものなのか、避難住民の生活の建て直しにつながるものなのか、疑問がわいた。対策本部は、市町村や住民の声を直接聞いているのだろうか。是非、市町村と話し合いを重ねた上での支援対策が示されて欲しいと思う。

富岡町の方々の苦勞が思われ、重苦しい気持ちが続いている。

《委員》

おだがいさまセンター（生活復興支援センター）では総務課長さん、企画課長さん、町内会長さんよりわかりやすい説明でとても良かった。また、センターの周囲には仮設住宅があり、私も中越沖地震により仮設住宅で2年間暮らした事を思い出しました。今仮設住宅で生活している富岡町の皆さんが大変な苦勞をしている事と察しています。

富岡町の復興に向けた課題の中に、土壌の汚染及びがれきの処分がありました。がれきの処分については新潟県としても積極的に支援する事が必要だと思う。（中越地震、中越沖地震では全国の皆さんよりご支援いただき復興できた）

原子力災害現地対策本部では各機能班が活動をして役割を果たしていくものと期待しています。

《委員》

富岡町 [おだがいさまセンター] に到着し沢山の仮設住宅を目の前にし、5年前の中越沖地震の被災状況を思いだした。

訪問先の質問事項は被災者の心情を考えた発言をとの事前の打ち合わせもあり緊張の中、説明が始まったが司会者の明るさで緊張もほぐれた。

社会福祉協議会の方から町民を講師として工房での（町民の職場として）製品を商品として成り立たせたいとの強い意欲が感じられ、力強さが伝わってきました。さまざまな雇用対策が国からも発信されているが安定した収入の確保はこれから生活する上で重要なひとつであり、全国に一日も早く販売ができるよう祈ります。

二番目の視察地である福島県庁の原子力災害現地対策本部は、狭く環境は決して良いと感じない部屋で皆さんのご苦勞と大変さが伝わってきました。県民の現在の状況を配慮されての事と想像していますが、もう少し環境の良い部屋にならないだろうかと感じました。

質問、要望等は予定時間を超えての機会を与えられ満足しています。

《委員》

- 1、原発は過酷事故を起こしたらお終いだと思っていたことを改めて確認した。
- 2、「安全神話」を信じこまされてきた原発現地と広範囲の住民の現在の苦難を現地視察で改めて認識させられた。信じ込ませてきた国、電力会社の罪深い行為に反省を求めたい。
- 3、事故後、1年4カ月経っても被災者にとっては将来の展望がまったく見

えないということは、原発事故にしかないことで同じ原発現地住民として他人事とは思えなかった。

- 4、現地対策本部を見て、この規模と施設と人員で満足な仕事が出来ているのだろうか、率直な感想を持った。
- 5、原発現地の人達の苦しみや不安に寄り添った対策ではなく、一方通行的に行われているのではないかという危惧の念を持った。特に地元自治体の意見が反映される仕組みがあるのだろうかと思った。
- 6、福島事故と同じことが柏崎刈羽原発で起きたらと考えた時、福島の原発現地と同じ苦しみを受けなければならないのかと思うと不安にかられる。
- 7、やがて柏崎刈羽原発の再稼働問題が、現地住民につきつけられてくると思うが、福島事故を踏まえた対策がない中で、安易な再稼働論議はすべきでないと感じた。
- 8、3組織の事故調査委員会がすべて調査報告書を出した。いずれの委員会も国と東京電力の従来からの原発対策と事故対策が不適切だと断定している。

それにもかかわらず9月に発足する原子力規制委員会はその人事を見ると従来路線を踏襲するのではないかと危惧されている。そうなれば規制庁も押して知るべしである。福島事故の反省をすべての出発点として規制行政を確実に進めるようお願いしたい。

《委員》

被災者の方が、前向きに新しいことに取り組む姿は、とても良いことと思います。

賠償については、被災者の方が早く前向きに再出発できるように、少しでも早くしてあげてを望みます。

原子力災害対策本部で、皆さんが懸命に取り組む姿には、頭が下がります。災害から、1年半たった今も、盛りだくさんの作業があります。もう少し広い環境に移れないものかと思いました。